

ブラームス録音小史 第7回

“Short history of Brahms Music Recording” vol.7

電気録音によるSPレコードのリートとその他の声楽曲

山田豊明

Toyoaki Yamada

ラッパ吹き込みのリートでスタートした「ブラームス録音小史」はSP録音編の最終回も電気録音によるリートで締めくくることになった。

ブラームスのリートがほんの一部を除き、ポピュラリティの面で他のジャンルの作品に一步譲るとしても、この作曲家をより深く理解するために重要な意味を持つものとして現在では認識されている。だが過去の一時期には、ブラームスのリートをシンフォニーや室内楽の片手間に作曲されたものとみなし、軽んじる風潮があった。そんなことも災いしてか、SP録音によるデメリットの影響を受けにくいはずの声楽曲であるにもかかわらず、それらを重点的に取り上げた例がSP時代においては皆無に等しかった。唯一の例外で、のちに紹介するHMVの協会盤さえ企画は頓挫してしまったように見受けられる。シューベルトの歌曲集「冬の旅」や「美しき水車小屋の娘」がヒュッシュュによって全曲録音されていることや、フーゴ・ヴォルフが集中的に録音されたことなどは対照的だ。

散発的にしか発売されなかったブラームスのリートではあったが、およそ30年間にわたるSPの電気録音期間には、それなりの量の録音が残されている。ところで、それらがLPやCDに復刻される機会があったとしても歌手ごとに編集されていたり、オムニバスであったりして、他の作曲家の作品と一緒に収められることが多い。ブラームスのリートだけを収集するという場合には、はなはだ効率が悪い。しかしある時、ブラームスのリートがかなりまとまったかたちでLP復刻されることになった。

「SCHUMANN & BRAHMS LIEDER ON RECORD 1901-1951」(RLS1547003/LP 8枚組)はブラームス生誕150年にあたる1983年にイギリスEMIから発売された。ラッパ吹き込みの1901年からSP録音末期にあたる1951年までの間に録音されたシューマンとブラームスの歌曲を、それぞれ4枚のディスクに分けて収録したアンソロジーだ。これはその後もCD化された形跡がない。